



柔らかな風…

肘掛けに添えた右手の甲を、ふうと撫でて遠ざかる。
手をかえして、通り過ぎた風を指先に感じてみようとした。

もう、いない…

まだ幼さが残る、端正だが寂し気な横顔がほんの少し表情を曇らせた。

病院の中庭は、よく晴れた青空に誘われたように沢山の人が芝生の散策を楽しんでいた。

彼女の側には誰も居ない。

陽射しを避けるように木陰に車椅子を停めて、うつむくでもなく、遠くを見るでもなく、一点の絵画のように静止した彼女の姿には、他者との繋がりを絶たれた者の孤独が色濃く張り付いていた。

膝に載せた詩集のページを、ほっそりした指先が戯れるように捲ってゆく。

大鷲が首をさかしまにして空を見る。

空には飛びちる木の葉も無い…

高村光太郎の『苛察』を彼女は読み始めた。

淀みなく詩を朗読する彼女の脇を通り過ぎる人はだが、誰一人振り向きもしない。

無関心というにはあまりに異様な光景であった。

まるでそこに誰も居ないかのような。

彼女の声は誰にも聞こえていなかった。

軽く引き結ばれた唇は少しも動いていない。

彼女は口をきけなかった。

蝉の声が響きを増す頃になると、詩を読むのに疲れた彼女は日差しに追われるように病棟へと戻りはじめた。

ワタシの声… だれにも聞こえてない…

どんなにおっきな声を出しても、だれも

当たり前、か

汗ばんだ小さな手でホイールを回し、ゆっくり、ゆっくり、舗装のゆき届いた路を進んでゆく。

中庭から病棟の入口に向けては緩やかなスロープになっていて、力の弱い彼女はいつも帰りに苦労していた。

リハビリを兼ねてワザと平坦にしていらないらしいのだが、患者達には不評であった。

いつもより多く外にいたせいか、入口まであと少しの所で疲れて止まってしまった。

ホイールはどこかで引っかかったみたいに、どうやっても動きそうになかった。

どうしよう…

どうでもいい…

どうしよう…

小さな葛藤が、彼女の眉間にひとすじの皺を作った。

ガタン ッ!

いきなり車椅子が前に動く。

驚いて振り向いた彼女の目に、逆光でシルエットになった人影が映った。

車椅子のグリップに両手を添えた影がニコリと歯を見せた。

だれ?

涼しげなブルーアイがふたつ、彼女のほうへ向けられていた。
彫りの深い東洋系の顔立ちの中で、その目だけが明らかに異質であった。

ハーフ、かな？

「(あなた、誰?)」

聞こえる筈の無い問いを発しながら、彼女は奇妙な違和感を感じていた。
暖かな波動を放つその目は、こちらへ向けられてはいても彼女を『視て』はいなかった。
焦点は彼女を素通りし、何処か知らぬ遙か彼方へと結ばれていた。

「(もしかしたら…)」

次の瞬間、彼女は心臓がとび出る程驚いた。

「ウン、そうだよ。見えないんだ」

答えたのだ。彼が。彼女の『声』に。

「(○×△□☆ッ！！…)」

小さな体のちいさな心臓が、破裂せんばかりにバクバクと鳴り響いた。
あまりの動揺に車椅子から落ちかけた彼女の肩を、思いがけず力強い手がしっかりと包む。

「ゴメン、驚かせるつもりじゃなかったんだ。困っているんじゃないかって…それでボク…」

ハッと気付き、彼は肩に添えた手をあわてて離した。
それを見て少し鼓動の収まってきた彼女は、日差しを避けながら改めて彼を見た。

青いTシャツにジーンズ。
スニーカーがヨレヨレだ。
うなじの髪が、風になびかずピヨンと跳ねている。

「(ワタシの声、聞こえるのね)」

「そうだよ、ビックリした？」

間髪を入れず彼が答える。

「(ビックリって… それって普通じゃないよネ)」

奇妙な語らいだった。

傍から見れば、無表情な車椅子の少女に少年がひとり言を呟いているようにしか見えなかった。

「小さい頃から声が聞こえた。でも気がついたら誰も喋ってない。聞こえてたのはみんなの『心の声』だったんだ」

「（目は？ その目はいつから？）」

小首を傾げて彼女が聞く。

「産まれた時から。ボク、世の中を自分の目で見ただ事は一度もないんだ」

「（そうなんだ…）」

彼女の『声』の口調が沈んだ。

「キミ、可愛いのかな？」

急な言葉にまた鼓動が上がりそうになった。

「（しっ失礼ね！ ナニよもう…アナタ名前は？）」

「殉。キミは？」

「（加夏子、カナでいいよ）」

それが、不思議な出会いの始まりだった。